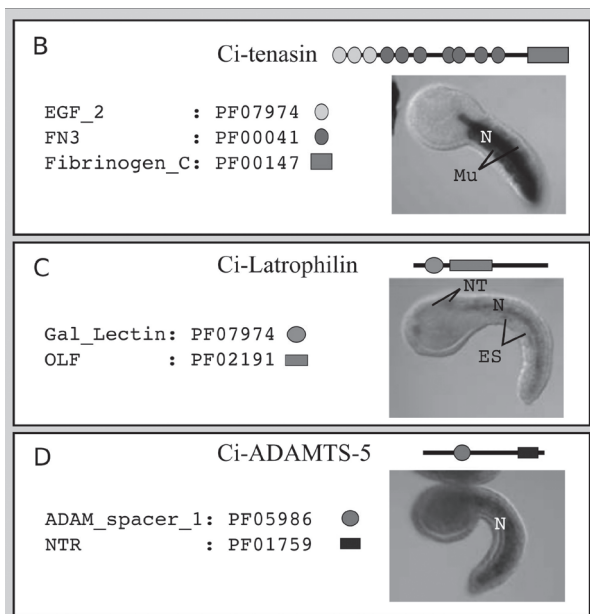


「進化発生学が紐とく脊椎動物の進化の歴史」

進化発生学という新しい学問分野の誕生により、遺伝子の進化と形態の進化の結びつきについての理解が深まり、動物の進化が、新たな彩りをもって語られるようになった。進化発生学の、最も重要な発見は、多様な多細胞動物の形が、共通の遺伝子を用いることで形成されているということにある。この遺伝子の共通性から、5-6億年前に生きていた祖先の姿の復元までが、可能になってきた。遺伝子の共通性から明らかになってきた脊椎動物の進化の歴史を概観する。

後半では、共通ではない遺伝子に関して、言及していきたい。多くの遺伝子は、多細胞動物で共通であるが、動物の進化の歴史の中で、新しい遺伝子の創成も全くなかったわけではない。数は多くないが、このような新しい遺伝子が、形態の進化にもたらしたインパクトは決して小さくない。脊椎動物に至る進化の過程で、ドメインシャッフリングというメカニズムによって創成された新しい遺伝子を調べることで、形態進化と遺伝子進化の新しい結びつきがわかってきた。脊椎動物を最もよく特徴付ける骨の進化と新しい遺伝子の創成の進化に関する研究を紹介したい。



2010年2月9日(火) 16:00~17:30

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

参加費：無料（事前申し込み不要）

講師：和田 洋

◇筑波大学 生命環境科学研究科 構造生物科学専攻 教授
 京都大学大学院博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員となった後、International Human Frontier Science Program Organization Long term fellowとして英国 Univ. of Reading に在籍。その後京都大学大学院理学研究科付属瀬戸臨海実験所助手、筑波大学生命環境科学研究科構造生物科学専攻准教授を経て平成20年4月より現職。
 専門は発生と比較に基づいた進化・系統学。



REC for NS

research and education center for natural sciences

